古墳・奈良・鎌倉時代

どんなところに住んでいたか

柱の穴だけ?
木や草など植物を利用して作られた家。木材の再利用や風化のため、ほとんどの場合は現代まで残りません。

■掘立柱建物

6区･8区にて掘立柱建物や土坑を確認しました。

どんなものを使って生活していたか

■水を入れたりする食器

古墳時代の壺

■盛る食器

古墳時代の高杯と杯身

■魚をとる道具（鎌倉時代）

土錘とは漁で使用する網に取り付けた土製の錘のことです。土錘の出土は遺跡の南端に集中しています。大門遺跡南側の湿地や川を利用して、漁をしていたのかもしれません。

網(レプリカ)

年　表

明治時代～	
江戸時代	
室町時代	安土桃山時代 500年前
鎌倉時代 ★	1000年前 A.D.1000年
平安時代	
奈良時代 ★	
飛鳥時代	
古墳時代 ★	1500年前
弥生時代 ★	2000年前 A.D.1年 2500年前
縄文時代	3000年前 B.C.1000年

★・・・大門遺跡に関係する時代

まとめ

発掘調査にて約2000年前から人が生活していたことが分かりました。地盤や日当たりの良さ、水辺の近さなどの暮らしやすい環境から、その後の時代も発展を続け、現在の田端地区につながっていったと考えます。

まめ知識　どうして発掘調査をするの？

地面の下には、昔の人々の活動の痕跡である「遺跡」が残っています。遺跡は、その土地の歴史を知る手がかりのひとつです。開発などによってやむをえず遺跡が失われてしまう場合、事前に発掘調査をおこなって、図面や写真の記録として後世まで残します。

編集･発行　袋井市教育委員会　TEL0538-23-9264(生涯学習課)
協　　力　袋井市袋井駅南都市拠点土地区画整理組合、袋井市都市計画課区画整理係
発行年月日：2020年2月29日

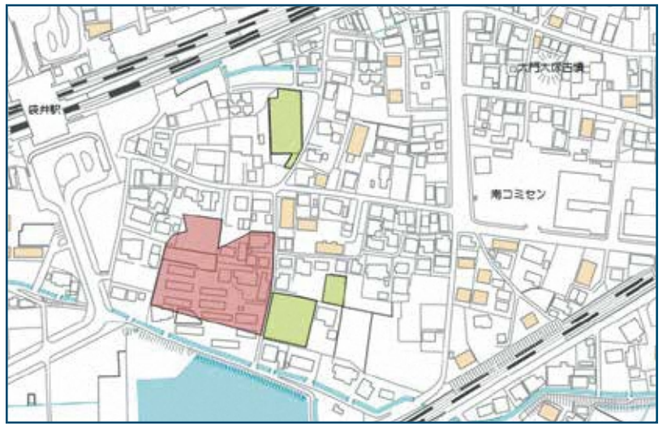
大門遺跡

田端地区

発掘調査

南西上空から大門遺跡を写した写真です。袋井駅南口まで伸びる小笠山丘陵の先端上で、弥生時代～現代までの生活のあとが見つかっています。

袋井市教育委員会



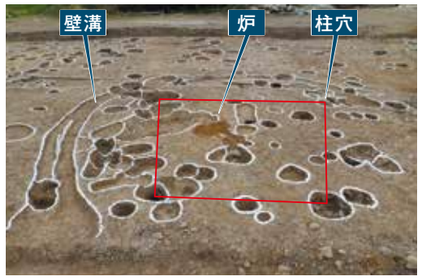
袋井駅南土地区画整理事業にともない、平成30年度より大門遺跡の発掘調査を実施しています。今年度は大門遺跡南西域の調査を行いました。発掘現場は日当りの良い南向きの斜面で、手前には高南地区が、奥には諸井の丘陵が広がります。このような見晴らしの良く地盤のしっかりした丘陵の上は、古代の人々も住みやすかったようで、主に弥生～奈良時代の建物の跡が見つかりました。

調査箇所
緑…平成30年度
赤…令和元年度

弥生時代

どんなところに住んでいたか

調査区全体にて建物の跡や土坑、溝などを確認しました。建物は、地面を掘りこむ半地下式の「竪穴式住居」と、地面に柱穴を掘って建てる「掘立柱建物」の2つの種類が見つかっています。右の竪穴式住居では、円形の溝（壁溝）が巡っていて、その内側に4つの柱の穴と火を焚いた炉があることを確認しました。



■竪穴式住居

登呂遺跡　復元住居

どんなものを使って生活していたか

■お米を炊いたり、盛る食器

7区では約2×2mの土坑からたくさんの弥生土器が出土しました。いずれも弥生時代後期（約1800年前）に作られたもので、食べ物の調理や盛り付けに使われました。

台付甕
煮炊き用。お米もこれで炊いていた。

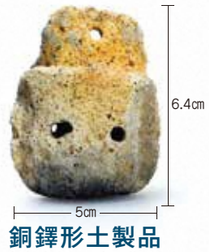
高杯
脚がついたお皿。盛付け用。

■木を削る道具

まだ鉄が貴重だった弥生時代では、石を磨いて作った斧（磨製石斧）を使って木を伐採していました。大門遺跡出土の石斧は刃先が欠けていて、実際に使われていたことが分かります。

■マツリの道具

大門遺跡の銅鐸形土製品は完形で、銅鐸の形の特徴をよく捉えています。銅鐸はマツリに使われたとされる道具です。袋井市では銅鐸そのものの出土はありませんが、掛之上遺跡（袋井市掛之上）で銅鐸の破片が、愛野向山遺跡（愛野）で小銅鐸が出土しています。袋井のムラでも銅鐸の模造品を使って、マツリが行われていたと推測されます。



銅鐸形土製品
銅鐸をまねて土で作ったもの。

銅鐸（レプリカ）全高60㎝